

実践事例研究

「エンパワメントの思想に立った子育て支援」

かわい ようこ
河合 容子

<キーワード>

(エンパワメントの思想に立った子育て支援)

- ① まめっこ親子教室 ③ 育児不安 ⑤ 否定的なパワー
② あかちゃん講座 ④ 子育て状況 ⑥ エンパワメント

<要旨>

1989年に合計特殊出生率が1.57人を下まわって以後、少子化とそれに伴い顕在化してきた育児不安が、社会問題として注目を浴びるようになった。私は1993年1月より名古屋市内で1才半から3歳未満の子とその親を対象にした子育て支援教室を主宰してきた。また市の社会教育施設において0歳児とその母親を対象にした講座を企画、運営をさせていただいた。

そこでは子育て支援を単に子育てのノウハウを伝える場とせず、母親たちの持つ育児不安に対し、母親自身が個性豊かな非力ではない存在であることを信頼し、母親たちを不安にしている知識、体験不足を補い、母親たちを抑圧している社会からの様々な否定的な力を認識する手助けを行うことにより、母親たちが自分の内なる感情や意志を肯定し、それをパワーとしていく過程を援助するという方法をとってきた。

育児不安の背景にあるのは希薄な人間関係といえる。そして育児不安の中心にあるのは、子育てという濃密な人間関係を持つことにより、自身の中に意識化されてくる「自分って何だろう」という自分探しの途中で直面する不安であることがわかってきた。エンパワメントの思想に立った子育て支援ではその不安に対し、母親たちが今までに受け取ってきた「性別役割の強制」「女らしさ」「母性」等様々なメッセージを意識化していくことを大切な視点としている。

この稿では私の実践を紹介したうえで、母親たちが周囲との関係を築きながらの子育てへと変化し、自己実現へと踏み出していく過程をエンパワメントの視点で捉え直してみた。

I. はじめに

私は学生時代「キャリア・ウーマン」という言葉にあこがれていた。しかし実際の選択は第一子の出産を契機にした退職だった。二年おきに三人の子を次々に出産し子育てに専念する毎日。子どもを通しての友人にも恵まれたが「私であって私でないような感覚」をもてあまし、その思いは膨らむばかりだった。第三子が一歳を過ぎた時「社会復帰」をめざし大学の一年コースに入る。そして再就職へ進んだ。家族との葛藤が起きはじめたのは再就職からだ。「母親なのにわがままな」「母親なのに何を贅沢を言う」という攻撃。それを受けて「迷惑はかけない」と一人で育児を背負い込んでしまった私。そして常に家庭を優先させる仕事ぶりに、結局周囲への遠慮から自ら又退職を選んだ。「女・男の平等ってどういう事？」悩み、学習する中でフェミニズムと出会った。そして私を変えたのはボリビア日系三世の知人の「私は今までずっと自由を大切に生きてきた」とい

う一言だった。自由は誰かの許可を得て与えられるものではない。(私に許可を与えるのは結婚するまでは父であり、結婚後は夫であった)自由は私自身の内にあるのだという発見をしたのは36歳の頃だった。その私が自己実現と経済的自立への足がかりに始めたのが子育て支援の「まめっこ親子教室」であった。療育指導員、保育者としての、四人の子の母親としての、地域活動での経験と知識を活かした小さな教室であった。「まめっこ親子教室」をスタートさせるにはパートナーとの出会いがあった。保母経験があり、児童書の研究、育児相談のボランティア活動を続けていた彼女は「よい母」であることを拒み、自分らしく生きることを大切に日々を送る人であった。また性を語れる人であり、彼女と私の出会いがあってスタートできたものである。

「まめっこ親子教室」で大切にしていこうと確認しあった事柄に二項目ある。一つめは、子育て支援教室ではあるが、子育て周辺の事柄にとどまらず、女性の生き方を問い掛け

る場にしていこうということ。二つめは、私たちが「教える」「指導する」のではなく、母親たち一人一人が自分流のやり方を見つけるのを、時間がかかっても大切にしながら援助していこうというものだった。

エンパワメントの考え方に触れたのは教室の準備を始めてから五年後の事だった。それまでお母さんたちが元気になっていく過程を見て、この教室のプログラムに一定の自信は持っていたが、それがエンパワメントだったのだということを知った。この稿で今までの実践をエンパワメントの考え方に沿ってまとめてみたい。

Ⅱ. エンパワメントの思想に立った子育て支援

1. 現代の子育て状況と育児不安。それに対する従来の母親への支援について

現代の子育て状況の大きな特色は、希薄な人間関係が生み出した孤独であると言える。

生活空間から路地が消え、空き地が消え、市場の対面売りが消え、高層住宅の扉の内側に母子二人の生活がある。子育てのパートナーである夫はなかなか帰って来ない。

さらに胎児期からお稽古、早期能力開発の宣伝攻勢が待っている。学校教育の競争の中で育ってきた親たちにとって、わが子が競争に勝てるかどうか、また何かができるか、できないかは重要な関心事であり、それ以外の子育ての目安が持ちにくいといえる。

人は他者との関係を通して「自分」というものに気づく。乳幼児は母親にはコントロールしにくい存在である。したがって子育てとは、母親の方が自らをコントロールし相手（乳幼児）に合わせる作業となる。その営みの中で、イラ立ち、とまどい、喜びといった感情を濃厚に感じる。一方母親の状態とは無関係に子どもはそこに存在し、常に養育的なかわりを必要とする。子育てとは決断の連続といえる。泣いている子を前に、「抱き上げるのがよいのか、泣かしたままでよいのか。オムツを替えるのか、授乳をするのか。」“モノのとり合いでケンカしている子をしかるべきか、放っておく方がよいのか。”“ここでほめるのがよいのか、黙っているのがよいのか。”等々、養育者は常に具体的な決断を迫られる。そして自分の決断に対して返ってくる相手の行動から、自分自身に直面し、また問いかけられていくことになる。このように子育て期こそ自分に出会う時である。その結果「自分って何だろう？」という大きな不安に直面する時であると言える。

従来このような状況に対し、子育てに関する教育や相談の公的な機会は保健所の「母親教室」「乳児検診」「乳幼児発達相談」などに限られていた。名古屋市の場合保健所が「育児教室」を開いている学区もあるが、制度化されているものではない。なお、平成7年度より「子育て教室」が予算

化され主に零～三歳未満児を持つ親を対象に、地域に密着した形で支援が始まっている。

教育委員会では社会教育施設での幼児期家庭教育推進事業がある。これには幼児を抱え親を対象とした「幼児教室」及び相談事業が中心となっている。「幼児教室」には託児が付くのだが、まず託児して学習すること自体に母親は躊躇する。名古屋市では託児対象が二歳以降となっているので、子はその年齢に達するまでは母親には学習の機会は保証されていない。また相談事業は個別相談が主体である。

障害等何らかのケアの必要な子を持つ母親にとっては教育や相談が保証されているのだが、いわゆる「普通の子」の母親には就園まで相談の窓口は十分には用意されてこなかった。また用意されているものも母親への一方的な知識・情報伝達であり、十分な個別の対応や母親の納得を作り出す双方向のかかわりは乏しい。保健所での指導で混乱した、と言う母親が「まめっこ親子教室」をたずねてくるのもその結果だといえる。相談に行くということは、上手に子育てできていないという自覚を持つことでもあり、母親が自身の思いを十分に述べながら相談することはむづかしい。相談に対し、「批判される、怒られる」と言った印象を持っている人は多い。

2. エンパワメントの思想に立った子育て支援とは

このような現代の子育て状況の中で、エンパワメントの思想に立った支援とはどのようなものを言うのだろうか。

過去アメリカカリフォルニア州 CAP(Child Assault Prevention—子どもへの暴力防止)トレーニング・センターのコーディネーターを務め、現在日本で CAP の普及に力を注いでいる森田ゆり(1)によれば、人は生まれながらにしてみずみずしい個性、感性、生命力、能力を持っている。しかし私たちは生まれてからこれまで社会からの諸々のメッセージを受けて育つことにより、本来もっている個性、感性、生命力、能力に対し、自信を失ったり信頼が持たなくなっているのである。その過程で働くパワーは誰かが誰かに向かって行使する力で、否定的パワーと呼ぶ。それに対しエンパワメントは自らの内に向かって行使する力であり、それにより生まれながらにして持っているみずみずしい個性、感性、生命力、能力を取り戻し、自分への信頼を回復していく。そしてそのパワーを身につけることで今までの周囲との関係の作り直しへと進んでいくのである。エンパワメント(empowerment)とは、em—(自らの)中に、power—変化を生み出す力をつける事であるという。

また「ウイメンズカウンセリング京都」代表の井上摩耶子(2)が紹介している定義によればエンパワメントとは、「権力を持たない集団や個人に対して、彼ら自身の生活を自己管理し、又彼らの方から他者の生活に影響を及ぼしていくのに必要な知識や影響力を獲得できるように援助する

過程]であり「フェミニスト・カウンセリングでは、女性がもっているにもかかわらず、そうとは気づいていない力に目覚めるようにエンパワーしていく」という。また「You can do it—あなたにはできる、というふうに力づけることによって、自己尊重感が高まる」という。

エンパワメントの思想に立った子育て支援とは、支援者は母親自身が個性豊かな非力ではない存在であることを信頼し、母親たちを不安にしている知識、体験不足を補い、母親たちを抑圧している社会からの（夫や親、周囲からの声として、また母親自身の声として存在する）否定的な力を認識する手助けを行うことにより、母親たちが自分の内なる感情や意志を肯定し、それをパワーとしていく過程を援助するものである。

Ⅲ. 子育て支援の実践

1. 概要

私の実践は2つある。1つは「まめっこ親子教室」(以下

「まめっこ」)であり、もう1つは「あかちゃん講座」(以下「あかちゃん」)である。まず概要を紹介する。

1993年1月より名古屋市千種区内の教会の貸しホールを借りて、「まめっこ」をスタートさせた。1989年に合計特殊出生率が1.57人を下まわって以後、少子化とそれに伴い顕在化してきた育児不安が、社会問題として注目を浴びるようになった時期である。(表1)

また、民間のグループ活動では広報宣伝に限界がある。このような子育て支援を本当に必要としている人のところへ情報が届くように、また若い世帯の母親が参加し易い料金設定ができるようにと考えて、名古屋市の公的機関へ企画を持ち込み働きかけることを考えた。その結果名古屋市の北社会教育センター(‘97年4月より生涯学習センターと名称が変更になった)で、’93年I期の主催講座として「あかちゃん」を開催することができ、それ以降年1回講座の企画、運営を担当することになった。(表1)

表1 教室、講座の概要

	まめっこ親子教室	あかちゃん講座
対象	1才半くらい～3才未満の子とその親	0ヶ月～1才2ヶ月の子とその母親
開室日と時間	週1回 1回約2時間	週1回 1回2時間
回数	10回で1コース 年に春・秋・冬の3コース(連続参加可能)	開講年によって違うが9～10回を1コースとする。 年1回の開講。
会場	名古屋市千種区、名古屋市北区の2会場	名古屋市北社会教育センター
定員とスタッフ数	千種区18組に対し3人、 北区22組に対し3人 (定員の違いは会場の広さの違い)	2～6ヶ月児 10組に対し3人 7～1才2ヶ月児 10組に対し3人
料金	1回1800円×10(保険料、おやつ代を含む)	市の主催講座として2000円
主な内容	・コーナーあそびを主体とした遊びの時間 ・テーマを決めたディスカッション ・子どもの預かり合い	・毎回テーマを決めた学習、ディスカッション ・手遊び、絵本紹介などのあそびの指導

注) なお「あかちゃん」は、「まめっこ」主催者と、社教センターで活動する託児グループの二者による運営。企画、運営の中心を「まめっこ」が担っている。

2. 「まめっこ」のタイムスケジュールと内容

時間の流れに沿って、具体的な内容とその留意点を述べる。(表2)「まめっこ」で大切にしたのは、参加者が多様な体験と働きかけの中から、自らが新しい方法を見つけていくのを待つ、ということである。

① コーナー遊びは自由遊びを主体とする。年齢に合った、家庭では体験しにくい様々な遊びのコーナーを用意する(表3)。遊びの強制はいっさいしないが、いろいろな遊びかたがあることを共に遊ぶことで子どもや親に提示していく。またスタッフが積極的に働きかけ、それぞれのコーナー遊びを設定した意図を母親に教え、子の遊びに母親がかかわるように促すことで、子と母

が共感し合う時間を作るようにした。

- ② 一斉遊び 集まった親子がひとつの遊びを共有することで仲間意識をもてるような時間を作る。スタッフのモチ味を大切に、発揮できるようにしている。内容にはリズムあそび、わらべ唄遊び、ペープサートや絵本紹介など。親子で遊べるモノが主体となっている。遊びに関して参加の強制はしない。
- ③ おやつはアレルギー対応で、基本的に全員が同じものを食べる。
- ④ ディスカッションは、A、Bの2グループに分かれペアを組む。Aがディスカッション中はBの人が、自分の子とペアのAグループの人の子を見る。途中でAとB

が交替する。(子どもの預かり合い)。ペアで子どもを見合うことで、自分の子ども以外の子どもとかかわり合う、という体験をする。この間の母子分離は強制しない。母が分離を希望しても、子どもが側を離れないときは、コースの中で分離していく見通しを母親に話して支えていく。

表2「まめっ子」のタイムスケジュール

9:30	表2
	自由遊び
9:55	一斉遊び
10:15	おやつ
10:30	ディスカッション
11:55	エンディングマーチ
12:00	

表3 コーナー遊びの内容

遊びのコーナー	表3
① 感覚遊び	
自由遊び	
・鳥のむき餌の砂場	
・油粘土	
② 真似っこ、ごっこ遊び	
・ままごと	
・お化粧	
③ ボール 大・小	
④ 上質の木のおもちゃ	
・数種類の木のおもちゃ	
・小さい積み木	
・電車、自動車、動物	
⑤ はさみ、ペン、カラーテープ	
水彩絵の具など	

や要望で決めていく。「①子育て周辺のノウハウに関する事②母親自身のこと③夫や夫婦の関係性について④早期能力開発の考え方について」。基本的に10回の中で4項目の内容がすべて取り上げられるよう配慮する。

ディスカッションでは母親たちが日常場面では表現することをためらう感情、たとえば「育児で疲れている」「子どもがかわいく思えない」「夫や、姑に腹を立てている」などを言語化し、相対化していく。又そういった感情を持つことが自分一人でないことを知る機会を作る。また似たような経験をしていても違った感情を持つ人がいる事を知る中で、自分らしさに気づくようにする。

3. 「あかちゃん」のタイムスケジュールと内容

「あかちゃん」も基本的に「まめっこ」と同じ考え方や方法を提案し、運営を担当する他のグループと協議して決めている。

- ① テーマを決めた学習、ディスカッション 全体講義、グループ別ディスカッションを通して、毎回のテーマの学習を進める。グループ別ディスカッションでは、母親の輪の真ん中に敷物を敷き、子どもを寝かすよう促す。その指示をしないと多くの母親は自分の子を抱いたまま2時間を過ごしてしまう。月齢がどんなに低くても子どもは目が覚めている時は周囲の子に関心を示し、関わりが作れる。乳児が関わり合うという発見は母親にとっての学習となる。また月齢の低いグループと、高いグループでは子どもの活動時間帯に差がある。午前睡の時間に合わせて母親のディスカッションが組めるようにグループ毎に配慮していく(表4)。テーマは表5を参照。講座後半では託児をして、母子分離の時間を作り(40分から60分程度)母親が自分と向き合えるよう援助している。
- ② 遊びの指導 グループ毎に月齢に合わせ手遊びやわらべうた遊び、室内での体を動かす遊び、絵本の紹介をしている。

- ⑤ ディスカッションはスタッフが交替でリーダーとなり、その日のテーマを決めファシリテーター役を務める。テーマは、次の4項目から、その時のグループの様子

表4 5/21「あかちゃんの育ちと生活」のタイムスケジュール

10:00	10:45	11:15	11:55	12:00
↑全体講義	↑移動、グループ毎の手遊びなど		↑	↑アンケート書き
月齢グループ別にディスカッション				

表5 1996年度1期「あかちゃんといっしょー子育て中だから何かしようー」プログラム

4/23 はじめまして ～私とあかちゃん～ 託児の会めだか	5/7 私の妊娠と出産 託児の会めだか	5/21 あかちゃんの育ちと 生活 わけっこ共同保育所 保母 北野沢文恵	5/26(日) お父さんと遊ぼう(1) ～野外パーティー～ 託児の会めだか	5/28 あかちゃんの育ちと あそび～あかちゃん 人形を作ろう～ (託児する) まめっこ親子教室 走出裕子
6/4 「三歳児神話」って 知っていますか (託児する) まめっこ親子教室 河合容子	6/18 わたしの中の「私」 をさがして (託児する) まめっこ親子教室 河合容子	6/23(日) お父さんと遊ぼう(2) ～「さくらんぼ坊や」 を見る～(託児する) まめっこ親子教室 河合容子	6/25 先輩ママの話を聞こう (託児する) 親子外遊び「どんぐり」 山中久美子	7/2 まとめ～子育て中だ から何かをしよう～ まめっこ親子教室 走出裕子

4. 「まめっこ」「あかちゃん」の母親に見る子育ての状況とその問題点

参加した母親とその子どもと実際に付き合う中で筆者に見えてきた、母親たちの子育ての状況と問題点についてまとめる。

(1) 母親の育児責任が強調される中で、母親は不安を抱えている。

参加した子育て中の女性の殆どが、就職を経験し、主に出産を契機に退職している。女性のM字型就労の谷底は上がっているとはいえ、「子どもが三才までは母親が家庭で育てるのが一番よい」という三才児神話は根強い。いじめにみられるように、子どもたちをめぐる状況は悪化するばかりで、小さな子を抱える母親の不安は大きい。

また母親には、「1 健康で 2 賢くて 3 たくましくて 4 情緒豊かな(女の子)、スポーツの得意な(男の子) 5 友だちがつくれる子」に育てるように期待がかけられている。実際「一人で育児責任を背負うのが重い」と泣き出した母親がいた。また、そこではその子がどんな個性をもっているかは抜きにされて、子と母の葛藤がおこり易い。

(2) 育児について夫との協力関係が作られていない。

乳幼児をもつ父親たちの多くは、20代後半から30代である。仕事がおもしろくなり始め、責任ある仕事を受けもたされ始めた年代である。そして、「上司が帰らないと帰れない」と嘆く若い世代でもある。「食事はいつも子どもと二人っきり」とか「せめてお風呂で触れ合って欲しいから夫が帰るまで(夜中になっても)子どもを起こして待っている」などの話はよく聞かれた。性役割の意識に支えら

れ、父親たちに育児の主体はおろか協力するという意識も育っていないことが、母親たちの発言を通してみえてきた。

また一方で母親たちも夫の育児への態度を受け入れている。不満はあっても「夫は稼いでくれるのだから」「仕方のないこと」と考え、働きかけすらしていないことが多い。夫たちは家族より仕事を優先させる。母親の多くも就労の経験があり、夫たちの職場での事情が分かることがその背景にあるが、退職し経済力を失い、今までのような対等な関係が持てなくなったこともディスカッションの中で語られていた。

(3) 子どもへのかかわり方がわからなくなっている。

若い親たちは自分の出産前に赤ん坊に接した経験が乏しく、育児への知識と体験を十分に持っていない。今年の「あかちゃん」では、「子どものオシッコが青くないのでびっくりしてしまった」という発言があった。(TVの紙オムツのコマーシャルで、オシッコが青い水で表現されているため)。子どもにかかわる仕事をしてきた者にとっては「あたりまえ」のことが「教える」「指導する」内容になってきていることがいくつかあった。

たとえば一才過ぎの子へのしつけに関して、「この子はまだわからないから…」と子の要求を全面的に受け入れる段階から「厳しくして教えていかねばならない」へ一気に進んでいく。わかるように、わからせていく工夫や努力をする過程が抜けおちている。子どもへの働きかけ方を具体的に示さないとわからないのだ。

またことばかけが上手でないことがあげられる。オムツからパンツへの移行期は、母親たちが最も苦勞する時期だ。すんなりパンツに移行することはない。「おしっこない」

と言っていたのにトイレから出てきた途端、ジャーッとおもらしする。うんちは必ずカーテンの陰に隠れてする…など。そこでは親は「失敗しても何も言わない」と言う方法がとられる。それは「子を責めることを言わない」という意味なのだが、文字通り何も言わない人がいる。

離乳食を与える時でも自然にことばが出ない。前述のように食卓に夫は不在なことが多く、母子二人きりでは会話をする気にもならないのだろうが、「おいしそうだね」「次は何にしようか」「モグモグね」といった食欲を促すことばがでない。スタッフの実演をきいて、「そんな風に言ったこと一度もない」と驚く母親たちが多い。具体的なことばかけのあれこれを指導するようにしている。

子どもと向かい合った時にことばかけが自然な形で親たちから出ないこと、また「子どもは高級玩具」と言ったり、親のファッションの飾りのような役割をさせるのを見ることから、母親たちは子どもを人格を持った人として受け止める事ができず、まるでモノのように感じているのではないかと筆者自身が感じたことがあった。

子どもが感情を持ち、コミュニケーションの中から相手のメッセージを受け取り、自分の行動を変化させる可能性を持つことを、親たちは知らないことが多い。子どもがみずみずしい感性ではちきれそうな存在であることを感じとれない親が多い。これは子どもが言語を獲得し、言葉によるコミュニケーションがとれるようになると改善されていくようである。

しかし子どもとのかかわり方が分からなくなっているもう一つの背景には、母親自身が「女らしさ」の範囲においてでしか自分の感情を肯定できなかったり、育ってきた過程での対人関係の中で共感する、受け入れられる、支えられる喜びを十分に体験していないことがあげられる。自分自身が子として喜びを体験していない人に、子どもとの関係を作ることはなかなかイメージしにくいといえる。そのためスタッフとの関係の中で受け入れられる、支えられる体験ができるよう、母親の受容に務めた。

(4) 子どもの行動、個性への評価を<母親自身>への評価とうけとってしまう。

子どもは、様々な体験をしながら成長、変化していく。その子の個性と周囲とのやりとりの中で社会性を身につけていく。しかし、未熟な子どもの行動、個性を母親たちは大人のレベルで評価し、それを自分への評価にしてしまう。「たいたたり、かみついたりするのは悪い子」「まわりとは関係をもたず集中して遊ぶのは協調性がない」と考え、そのような子に育てたと自分を責める。特に他の子に対して攻撃的な行動やふるまいをする場合、母親が自分を責め皆の中に出てこれなくなることがあった。

(5) 目の前の人と直接つながれない。

参加動機の中で「公園に人はいるけど、もうグループができていて入りづらい」という話がよくでる。“公園デビュー”といわれる程、その時は緊張するものようだ。そして母親たちは目の前にいる人とは、自分の感情やその時の自分自身の判断などについて語り合うことが苦手なようだ。その一方で、子育て雑誌の投稿欄、育児交換日記のグループは盛んである。新聞の投書欄でも意見交換が続くのを見る。目の前の相手でなければ、かなり深い話も自分を出してするわけである。

「まめっこ」の来室者に聞くと圧倒的にディスカッションを楽しみに来ると言う。信頼できる誰かがいて他の母親との間をコーディネートしてもらえば話ができるし、してみたいようだ。

IV. エンパワメントを目指した働きかけとは

1. 母親たちを抑圧する否定的なパワーとは何か

Ⅲ-4 で見た母親の子育て状況から、母親を抑圧する否定的なパワーを見てみよう。

母親たちを抑圧する力とは以下のような事であると考え。それは女性としての母親を抑圧する力であり、また他者とのつながりの中で生きていく人としての存在を抑圧する力として現れている。

- ① 「育児は女性の役割」という意識
- ② 性役割意識の中で経済力を失うことへのあきらめのため、夫婦間で妻の地位の低下。
- ③ 「女らしさ」という社会規範
- ④ 母性イデオロギー
- ⑤ 子どもの成長、変化の見通しへの知識不足
- ⑥ 受け入れられる、支えられる安心感と喜びの体験不足
- ⑦ 共感し合う喜びの体験不足

2. エンパワメントを目指した働きかけ

エンパワメントの思想に立った子育て支援では、Ⅳ-1 で見た否定的なパワーに対し、母親たちが以下のことを達成するよう働きかけていく。

- ① 複数のスタッフ、母親と出会う。
- ② 具体的な子育ての悩みについて相談をし、解決していく。
- ③ 子育て中の不安や不満は自分一人のものではなく、母親たちに共通するものがあることを知る。
- ④ 不安や不満を言語化し、相対化していく。
- ⑤ 不安や不満に対しジェンダーの視点から考えてみる体験をし、夫をはじめとする周囲との関係の作り直しへの新しい選択肢を得る。
- ⑥ スタッフや母親たちの子どもへの働きかけを見たり聞いたりすることで、子どもとの関係を作っていく上で

の新しい選択肢を得る。

- ⑦ スタッフや母親たちとの関係の中で共感や、受け入れられる、支えられる喜びと安心感を体験することにより、子どもや夫との関係の作り直しへの新しい選択肢を得る。
- ⑧ 子育てには画一的な方法があるのではなく、「私にできる、私らしいやり方を見つけていこう」と考えることができる。

V. 成果と課題

4年間の活動を通してここで、成果と課題をまとめる。

1. 成果

(1) 孤独な子育てから開かれた関係の中での子育てへ
「まめっこ」「あかちゃん」の回を重ねるうちに母親たちの表情が明るくなった。自信なげな表情が薄らいでいく。母親たちは自信を回復し自分への肯定感を高め、開かれた関係の中での子育てをスタートさせていく。

ただし一回の講座の受講や、教室参加で母親たちの子育ての不安が解消され、エンパワーされるとは限らない。そして「まめっこ」「あかちゃん」で出会ったスタッフがずっとそばにいるわけではない。一人でがんばりすぎず、開かれた人間関係の中で「支えを求める」力をつけていくことが重要である。「あかちゃん」では毎年講座終了後に自主グループが作られるように働きかけた結果、毎回グループが作られている。そして講座参加者以外のメンバーも受け入れ、社教センターを拠点に活動している。「まめっこ」でも卒業後の自主グループがいくつかできており、ディスカッションを中心とした活動を開かれたグループとして行っている。また現在では参加していた母親がスタッフとして支援する側になっているのも大きな成果である。また主催したスタッフとの関係を続けている母親たちもいる。

(2) 自分探しから自己実現へ

母親たちは自分の中に「母親」以外の顔を思い出し、認めていく。そして他者優先の生活や周囲との関係の見直しに入る。その結果、託児付き講座の受講や仲間と預け合っの学習、また保育園の一時預かりを利用して学習に出たり、再就職、ボランティア活動など母親・主婦以外に自分探しや自己実現の道に進む人がでていく。

(3) 子どもとの関係がよくなる

子育て不安を抱えるがゆえに生じていた親子の間のずれは解消されていく。また多くの子どもと接する経験の中で、「その子らしさ」に気付き、それを受け入れていく母親が多い。母子関係は良くなっていく。

2. 課題

性役割への疑問を自らの中に持つことは、子育て中の女性には実は大変難しいのだと思う。ジェンダーの意識をし

っかり植え付けられ、今子育てに専念しているのだから。子育てに疑問を持ってしまったら、自らの立っている場が危くなるのは想像に難くない。その中で母親たちが、気づき、変わっていく前に子育ての次のステージに上がってしまい、私たちと離れていってしまうことも多い。女性問題の解決は一朝一夕にはいかない。子育ての伴走者としての支援体制作りが課題である。

- (1) 「まめっこ」で得たパワーを参加者が地域へつなげる、たとえば子育てグループを作るなど、を期待しているがそのようには進んでいない。支えられて得たパワーを、新しいつながりを作ることでさらに強めていくには何が足りないのか、今後の課題である。
- (2) 特に夫を育児に巻き込んでいく具体的な提案が不十分であること。前述の自主グループ活動も、父親を巻き込む工夫ができていない。「あかちゃん」では父親参加の日を設定することで、父親の態度が変わっていったことが受講者から報告されている。性役割の見直し、夫婦間の対等性等への気づきに向けての働きかけに更なる工夫が必要だと感じている。

VI. むすび

子育て支援を子育てのノウハウの伝授にとどめてはならない。女性問題としての位置づけをし、他のジェンダーの問題とともに解決の方法を考えていくことが必要である。現在子育て支援にのり出した保健所や保育園の担当者に、どれだけ女性問題の学習が用意されているだろうか。子育て支援の名目で女性たちを「良い母」へ縛り付けていくことのないようにする必要がある。

子どもの小さい頃こそ父親が育児の楽しさを実感できるチャンスである。(父親たちは子どもが片言をしゃべり始める前はどうかかわっていったら良いか不安だが、言葉が出始めると子どもと遊ぶ楽しさを実感することが、母親たちの報告からうかがわれる。)母親たちの多くが「子育ては大変だが、楽しい。」と語る。その楽しさを父親たちにも経験してもらいたい。中村正(3)はその子育て経験から、子どもとの「日常を共有できることからしか親性は発達しない」と書き、男の親性の獲得と発達の可能性を述べている。子育て期こそ、女男の役割分業の問い直しと新しい生活の創造の絶好のチャンスである。エンパワメントの波が広がっていくように今後も活動を続けていきたい。

(東邦学園短期大学女性自立支援センター 職員)

引用文献

- (1) 森田ゆり著「子どもの虐待～その権利が犯されるとき～」岩波ブックレット No. 385 岩波書店
- (2) 井上摩耶子 「女性のエンパワメントとサポーターの

役割」

東邦学園短期大学女性自立支援センター編 「女性の
【ひとりだち】への電話相談員・養成講座記録集
1996」

(3) 中村正 「子育てする男」

かがわブックレット95 メンズセンター編「【男
らしさ】から【自分らしさ】へ」 かがわ出版